

資料 1

弓道について

基本計画部会
部会長 岡崎 廣志

審査会、講習会、そして大会などを見ていて、ここ数年というよりもっと前から感じていることは、なぜこんなに中らなくなってきたのだろう、ということです。

これでは正直、将来、弓道のレベルを維持していくことは難しいのではないかという疑問が湧いてきてしまいます。弓は的に中って初めて射の内容を問えます。弓道は精神性を強調しているのだから的に中らなくてもよい、というものでは決してありません。的に中らなくてもいいなら、巻き藁を引いていればいいだけです。的に中らないのには理由があるわけですから、それを克服していくのが弓道の修練のはずです。

なぜこのような状況になってしまったのか、各講習会の講師を務める中央委員の先生方はよく考えなければなりません。

私は、一つには細かいことを教え過ぎているのではないかと思っています。例えば体配の指導が微に入り細を穿つように指導されていますが、射位で弓を構えるまでの間に体配に気を使いすぎて射に対する集中力を大きく欠くことになってしまっているのではないかと危惧しています。体配は射技を生かすために必要欠くべからざるものです。しかし、体配だけが素晴らしくて弓に生かし切れなければ、本末転倒で全く意味がありません。体配は隙を作らず、武道としてふさわしい立ち居振る舞いが出来るよう指導してほしいと思います。武道は対峙するものです。常に状況の変化に応じて、瞬時に適応できる機敏さ・柔軟性のある体構えを身につけることを眼目に指導していただきたい。

また、射技の指導も細かい技術にこだわらずに、「体で離れを生む」弓を指導してほしいと思います。「体で離れを生む」弓とは、要は体の中にバネを作り、伸び合いによって離れを生みだしていく射です。そういうメカニズムによって離れは軽く鋭いものになっていくはずですが。

教本に従って指導するというのはいいのですが、字句にこだわるような指導は適切ではありません。人間の体の動き・働きは言葉で説明し表現しきれるものではありません。教本第 1 巻は現在の弓道の基本となっていますが、基準として指導に使ってください。その他の副読本の類はあくまでも教本の補助・参考にとどめて下さい。教本の解釈の一助と考えて下さい。

射は、百人いれば百通りの弓があります。千人いれば千通りの引き方があってしかるべきです。一人一流の世界です。弓を引く人の個性が十分に生きていなければいけません。射位で誰の助けも受けずに自分の弓を引き切るのが弓道です。指導者が自分の弓の引き方を相手に強要するような指導では、その人に合った弓を引けるようにはなりません。依存心を嫌い自立を促し、自分の目指す弓道へ進むべく導いて下さい。

まず、指導者は受講者などと対一の人間として向かい合ってください。そのように受講者と向かい合った時、初めて技術的精神的な真髓が相手に伝わるものだと思います。教えてやるとか、自分の方が優れている、などと思って相手に向かうほど傲慢なことはありません。指導者は自分の弓を引いてきた経験の中から受講生などの様々な悩みや課題の解決となるであろうことを提案し、受講生は各々がそれを選択して工夫しながらその人の射を作っていく、というのが理想の指導ではないかと思っています。相手が受け入れられないような指導を強要したり、従わない相手を精神的に束縛したりでは、相手の進歩には全くつながりません。

人はそれぞれ違うのですから、自分に合った弓を探して試行錯誤を繰り返し、失敗しながらそれを教訓として前に進むものです。それを見守りより大きく育つように導くことを目指してください。次の世代の弓道人の芽を潰すようなことにだけはならないようにしたいものです。

講師は、受講者から評価されるよう絶えず自己研鑽に励んでいただきたい。弓はつまるところ自分の引いてきた経験でしか指導はできません。まず、自分の弓に自信を持ってください。自信が持てるほどの修練を重ねてください。講師の絶え間ない修練の姿が射に映し出された時、受講生は自然と敬慕の念を抱くものです。自分が引けもしない弓を教えることは、本物の指導とは言えません。たとえ自分が教わった先人の言葉を伝えることでも、自分の経験を通してその言葉を自分の体で消化してから指導してほしい。そうして経験を積み重ねてきたものが射として評価され、ひいては弓引きとしてあこがれの対象となって指導を切望されるのだと思います。

審査委員としても、受審者を一人の人間としての評価となるよう努めて下さい。絶えず審査眼を養い、射を見極める努力をしていただきたい。射の本質を問うのが審査のはずです。体配の小さな違いなどで審査の結果が左右されてしまうことがないように心掛けて下さい。